

# 新・下野市風土記

## 万葉集の不思議



下野市教育委員会 文化財課

『万葉集』については、中学校の国語の授業で教わるため、奈良時代に編さんされた歌集であること、編者が大伴家持であること、防人の歌が収められていることなどは、多くの方がご存知のことと思います。

でも、意外と正確なことは知らなかったり、忘れてしまっていたりするのではないのでしょうか？  
今回は『万葉集』について、改めて復習してみましょう。

### 万葉集とは

万葉集という言葉は、「万」と「葉」と「集」に分解することができます。

万＝萬世、葉＝世＝時代、すなわち、この歌集が末永く後の時代まで伝わるように、という意味であると解釈されています。

万葉集は全20巻からなり、天皇から庶民まで、いろいろな身分の人々が詠んだ歌、約4,500首が収められています。舒明天皇（630年）の時代から、最後の歌である4,516番の歌がつくられた天平宝字3（759）年まで、約130年の間に詠まれた歌です。

編さんや成立の経緯については詳しく分かっていませんが、幾人かの編者の手を経て、最後に大伴家持により20巻に編さんされたと考えら

れています。

構成は、巻ごとにおおよそ年代順、国別に配列されています。

歌は、次の3つに大別されます。

- 相聞歌：相聞は、お互いの消息を交わし合うという意味で、恋の歌だけでなく、親子・兄弟姉妹・友人などの間柄で贈答された歌も含む
- 挽歌：死者を弔うための歌
- 雑歌：相聞歌や挽歌に分類されない、行幸や遊宴、旅など様々な歌

また、巻の14は東国各地の歌を集めた東歌で、巻の20には防人歌が収められているため、この2巻には、方言で詠まれた歌が多く収録されています。

### あかねさす——事実かパフォーマンスか

学校で習う歌に、額田王のものがああります。「あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る」

訳 [あかねさす紫草の咲く野を歩き、標を張った野を行くと、あなたが私に袖を振ってくれましたが、そんなに袖を振ると野の番人に見られてしまいますよ]

この歌は、天皇が蒲生野に猟に出たときに額田王が詠んだもの、という設定です。紫草は藤の花で、「袖を振る」は、恋人の魂を引き寄せる恋のしぐさを意味しています。

この歌に対して、大海人皇子が返した歌が、「紫草のにはほえる妹を憎くあらば人妻故に我恋ひめやも」

訳 [紫の花のように美しい香りのするあなた（額田王）を、天智天皇の妻となった今でも、人妻と知りながら、こんなに恋しく思っています]

この2首の歌は、現代のワイドショー以上に複雑な状況を示しています。

額田王はかつて大海人皇子との間に娘（十市

姫皇女）を授かっていたのですが、大海人皇子の兄である天智天皇に気に入られ、妻にされてしまったのです。

今は実の兄、それも天皇の妻となっている元妻に、（魂を引き寄せようと）隠れて手を振っている——1,300年前のこととはいえ、理解しがたい人間関係です。

一説では、この額田王の「あかねさす……」と大海人皇子の「紫草のにはほえる妹を……」は、宴席を盛り上げるために、列席する人々の前で詠まれた一種のパフォーマンスだったと言われています。この2首が、万葉集の巻一（晴れやかな場や儀礼の場での歌を集めた巻）に収録されていることがその説を裏付けているというのですが、真実は当人のみぞ知るところでしょう。

下野国府には、都から赴任してきた国司たちがおり、河内郡の郡役所の職員も、年に数回、平城京に行っていました。都風の宴席が行われた際には、下野でも、このようなパフォーマンスが行われていたのかもしれませんが。